

〜ひょっこり  
三兄弟?〜

新緑の木々に落ちる雨粒の音が、来たるべき夏の足音にも聞こえてきます。そんな梅雨空の合間をぬって、ふたたび西原の海へと出かけました。

埋め立て地の所々には草が生い茂り、降った雨でできた水溜まりは、キアシシギやチュウサギといった野鳥たちのつかの間の生活の場となっていました。その光景は、ここが人工の埋立地であることを忘れてしましそうなになります。

その野鳥たちを横目に通り過ぎ、仲伊保川、稲国川、浜田川、内間川が注ぎ込む南西石油株式会社の水路口付近の干潟へと進むと、小



干潟にひょっこり現れたヒルギ。

さな緑が目にとまりました。それはマングローブ植物のように見えたので、傾斜面を下り、近くへ行って観察してみることに。するとそこにはヒルギ三きょうだいが、チヨン・チヨン・チヨンと生えていました。

「へえ、こんなところになぜ?」というのも、これまでの植生調査で、マングローブ植物が確認されたという報告はありません。つまりかつての西原の海岸には存在しなかった植物が現れたということになりますが、今のところその理由は分かりません。

遠い古代や琉球王国の時代に、西原の海岸ではどのような動植物が生息していたのでしょうか。

また、海岸沿いに人々が移り住むようになって以後、塩害や海水の浸水を防ぐため護岸工事を行い、屋敷林や生垣をつくるといった植林を行います。

その当時は、何の植物が植えられていたのでしょうか。そして現在の環境はどうなっているのでしょうか。

町史では、このような西原の自然環境の過去、そして現在までの歴史を、考古遺物や歴史書・聞き取り調査や現地調査などから把握し記録することが必要であると考えています。人間の歴史を伝えていく上で、その地域の自然環境は切り放すことはできないからです。

例えば、近年まで海藻の海人草（方言名：ナチヨラ）は虫下しの薬として、ギンフナ（タイユ）は病人の精進料理として利用されてきました。人々は、身近な自然に生きる動植物を薬として用いてきたのです。

これから、中城湾港の立事業などによって西原の自然環境は変化していくことでしょう。その将来の自然環境は、過去の歴史や現在の状況を把握することによって展望できるのではないのでしょうか。

ところで、ヒルギ三きょうだいは今後どう成長していくのでしょうか。